
多重世界を渡り歩く

マネー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多重世界を渡り歩く

【Nコード】

N6383I

【作者名】

マナー

【あらすじ】

偶然から世界の敵と契約せざるを得なくなった俺は別の世界へと飛ぶ。今まで二次元で考えてた世界に。そこで俺は俺なりに生きよう。

最強系です。ハーレムにはするつもりないけど。テンプレを出来る限り回避したいと思います。出来ない所も多々あると思いますがそれで良いという方はどうぞ。

注 息抜きなので更新不定期です。

第一話：偶然とはかくも恐ろしい（前書き）

最強系を書きたいと始めます。といっても見切り発車かつ息抜きなので細かい点はスルーというかなんというか。

第一話：偶然とはかくも恐ろしい

山がある。

白く重厚な雲に覆われた曇天を貫く山だ。

天高く広がる雲の海を俯瞰出来る山頂に、男が一人居た。

濃紺のドレスシャツにネクタイ、フレンチ・コンチネル風のダークスーツ。その上から同じく濃紺のロングコートというおそよ場違いな正装を着込む東洋系の男。

そしてヤケにギラついた眼が印象に残る男だ。

背負う荷物は服装に似合わぬ巨大なリュック。30キロ近いそれは不自然さを滲ませる。

「……ふん。久しぶりの日本だというのにアキバにも行けずに山登りとは、などと思っていたが」

男は辺りを見渡し、見た。

海拔2000メートルを僅かに超える高度にありながら、天気恵まれ、男の居る山頂からは遠くまで広がる白い海、雲海が広がっていた。

「悪くない」

と眺めるのもそこそこに荷物をそばに降ろし、取り出すのは携帯食料だ。

日本では普遍的なおにぎり。

ライスボールと呼ばれる高カロリー食品を口にし、

「旨い。やはりクソ油塗れまみの千倍はいい」

数口でひとつを片付けた男は二つ、三つ、と残りも手早く片付ける。

2分も掛からず5つのおにぎりを食べ終えた男はゴミをきつちりと分別し、リュックに押し込む。

次に中から取り出したのは黒光りする掌に収まるか収まらないかといった大きさの機械。

ボックスの収められたそれは監視カメラを想起させる。

「……どこにしたものか……」

男はしばらく歩き回り、周辺の地図の頭に描きながら思考し、

「む？」

急斜面にわずかな窪みを発見。

柵もあり、あそこならばまず人目にはつかないだろう。

急斜面と行っても角度にして約60度。多少でも訓練を受けた人間ならば問題はない。

「よし」

眩き、行った。

柵を乗り越え、滑らないように注意しながら山肌を下る。

数メートルも下れば、目的の地点に到達。

窪みにボックスを押し込めば作業は終わりだ。

しかし、

「ここに……なんだ、これは？」

先客があつた。
それは、黒い石だ。
ただひたすらに黒い。
見ているだけで惹きこまれる様などこまでも深い黒を携たづなえている。
漆黒という言葉は、この色を示していると言えるすら思える。
本能が命じるままに、身体が動く。
指を伸ばし、触れた。
その直後。

「なん……!？」

“黒い光”が溢れた。

男は反射的に身構え、しかし飲まれた事を自覚する。
自身の置かれた状況を把握しようとして、眼を凝らす。
しかし、

「なんだ、ここは」

何も見えない。
何もないかの様にも思える、否。
黒が見えている。
まさしく漆黒の世界。

「
」

辺り一面黒一色。

地面が見えず、

壁面も見えず、

天井も見えない。

宇宙に放り出された不安定さだ。

だが、分かる事が二つだけある。

一つは、ここは閉じられた世界だという事。

そしてもう一つは、

「あれは……光、なのか？」

前後左右正面背後。

あらゆる場所で黒い光うねっている。

まるで生命の様に力強く燐光する何か^が確かに感じられる。

人間に残された僅かな本能が、怖れ、畏れ、しかし^{おそ}懼れながら引き寄せられる。

魅入られるように見とれていれば、音がした。

脳に直接響いてくるそれは声だ。

『よっ』
「……」

これが一体どういう事象であるのかどうか、一切が不明。

故に迂闊な答弁は厳禁。

しかし、情報は必要な為、最低限の答弁は必須。

難しい状況だと男は思う。

『無視してくれるな、ニンゲン。いや、全く今日は最良の日というヤツだ。考えるだけでも……ふふふ、は、ははははは！……』

「ギッ ……？」

脳を侵すソレは余りに膨大なナニかとして男を襲う。
言語として理解出来るモノではない。

ただ膨大な圧力。

人間の脳をこんなモノを受け入れられる様には出来ていない。
耐えうるはずもなく男は完全にコワれた。

『あ、スマン』

呆気なく人間を終わらせる波動を引き起こしておきながら、迂闊にもやりすぎたといった声音だ。

『……ん？ 壊れちゃったか。それじゃ困るんだよ』

当然、コワれた男には理解出来ない。

既に何かを思考するだけの機能を残していないのだ。
僅かに困ったという感情を発露した声は、少しの間黙り、

『よし。おい、生きてたら返事しろ』

「……………あ、あ？」

男は己の意識が存在しているという事実を奇怪だと感じつつも、
生の実感を得ている。

確かに自分は生きている、と。

黒い石に触れ、黒い世界に取り込まれたのは覚えている。
同時に、ナニかに精神を押し潰されたのを“知っている”のだ。
まるでどこか別の場所でソレを見ていたかの様な感覚。

「何が……………どうなっている？」

『おお、悪いな。壊しちゃった』

「壊した？」

同時。

頭に情報が氾濫する。

際限なく溢れ出でる真実というなの情報（毒）が再び男を侵し、しかし今度は壊れなかった。

『あ、お前を再構築すんに俺の因子入れたから。世界が見えるだろ？』

「……魔神？」

情報が知識に至る。

魔神。破壊神とでも言うべき破壊を司る真性の神。

魔と神が分かたれる以前の真実の姿。

『そう、俺だ。悪かったな。あんまりにも嬉しくて、つい、な？』

魔神の因子から流れてくる情報が強制的に教えてくる。

世界の成り立ち。

魔神という存在。

天神という存在。

天神。魔神と同じく魔と分かたれる以前の真性の神の一柱にして、より神の性質を強く残す者。

天神が世界を創造した。

魔神も賛同した。

だが、その在り方は相容れない。

紆余曲折を経て、魔神の存在を危惧した天神は魔神を封じる事を決定。

故に、魔神は天神を、同位の神を、世界の全てを敵にした。

『これであいつんトコに行けると思うとなあ。くくく』

戦闘系を重視する魔神に対して天神は創造のみ。直接対峙しては勝敗は眼に見えていた。

故に天神は不意を突いて、魔神を打ち倒す。

だが、魔神を危険視しながらも創造神たる天神は魔神を殺せなかった。

破壊を司るために、誰よりも破壊を知っていたのだ。

だから、魔神は封印される事になる。

封印する世界は頂点世界。ピラミッド型に連なる世界の頂上。

そこは神秘の住人にとって死の世界。いかなる神秘も許さない世界。

封印はいずれ破られる。

天神はそれを知っていた。だから封印を破っても外に出れば消滅する状況に追いやった。

数十億年前に、この世界に魔神を封じた封印石を埋めたのだ。

だが、封印は弱まり、外の世界の住人が意思に触れた瞬間に、魔神はソレを取り込んだ。

という流れを“創り”上げた。

『よし、小僧。俺と契約しろ』

「……」

『俺のマテリアル上での寄代となれ。寄代がなければ、俺はこのマテリアルに干渉するどころか存在する事も出来ないんだ』

マテリアル。

物質界という意味で、いわゆる現実空間を示す。

魔神にとってこの封印は殻であると同時に防護でもある。石の外に出れば即ち死。

神秘の存在では避けられない事実。

『あ、それと、お前もこの世界に居続けると消えるぞ、多分』

「なに？」

『お前には感謝してるんだ。偶然とはいえ、俺の目的を達成する一因になったんだからな。だから直した。俺の因子を入れてな。が、ニンゲンの身体なんぞすぐに侵すだろうぜ？ 何せ魔神の因子だ。そうでなくともこの世界に居たら神側に狙われるだろうよ。ま、基本的に俺が皆殺しにすっから大丈夫なはずだが』

頂点世界に封じたとはいえ、相手は魔神。

呼び起こした者に怒りを向けてもおかしくない。

「……ここには居られない、か」

『ま、元気出せ。他の世界に行けるんだぜ？ いい事じゃねえか』

「気軽に言ってくれる」

他の世界。

この世界の下位に当たる全ての世界。下位世界から上位世界に干渉する事は出来ないが、頂点の世界の下とはつまり全てだ。

下位世界という、小説、漫画などの想像された世界。この世界の住人が好きに弄繰り回せる世界。

そう思っている世界。

天神によって創造された世界をなんらかの形で垣間見た人間がソレを元に漫画やらを作ったというのが事実だ。

確かに、そんな世界に行けるのは嬉しい。実に楽しい事だと言える。だが、

「……隊長には迷惑を掛けるな……」

『もう会えませんがでも言えはいいじゃねえか』

「殺されるだろうが。……とりあえず言える事だけ言っしかないな」

『少しくらいなら居られるしな、問題ないだろ。で、小僧。それよ』

り契約だ。名を言え』

契約とは相互同意の上になりたつものだ。
当事者の意思表示の合致がなければそれは契約足り得ない。
そして、今回を見逃せば次回がいつになるか分からない魔神も、
こちらの条件をある程度は飲めるはず。

「魔神」

『なんだ？』

「契約と言ったな？」

『ああ』

「契約し、俺がアンタの何らかの干渉媒体になる。それは理解した」

魔神にとって最優先の利益であると同時に、最低条件は、確実に
提供する事になる。

ならば、こちらにも利点が欲しい。

こちらが下なのは確かだが、ある程度の譲歩は引き出せるはず。

『そうみたいだな』

「俺にとっての利点はなんだ？ 一方的に媒介にされるだけか？」

『余剰魔力をやるっ』

余剰魔力。

魔力のある世界の住人は、呼吸と同様にして大気の魔力を吸い込
み、吐いている。

その“吐いている”魔力が余剰魔力。

つまりは無意識に垂れ流している不要な魔力であり、本人からす
れば感じ取れぬ程に微弱なそれ。

「なんだと？」

今ならば分かる。

魔神の知識の一部が、因子から流れてきている。世界を創った神の設定。

魔力という存在。その在り方、使い方、全てを。だからこそ理解出来る。

黒いうねり。

有り得ざる黒い光。

この空間に存在するあの光全てが、可視化する程に凝縮された魔力であり、余剰魔力。

その事実是一个の存在には理解できない規格外。いや。

……規格外という言葉ですら生ぬるい！
理解してか、していないのか。魔神はなんでもないように言った。

「だから、余剰魔力。言葉の用法は正しいだろうか」

魔術という行為も知った。

魔力を扱う術。世界の誰よりも、否。

世界よりも知っている魔神の知識から理解している。

「いや、用法どうこうでは……。全て、俺に……？」

まさしく異常なまでの魔力を扱えるという事は、出来ない事が無いに等しい。

そしてこれは、契約によるものだ。

契約の恩恵を授かれる魔術、契約魔術がある。

それは、契約対象と直接的な魔力干渉を行い、パイプラインを繋ぐ事により行使する術。単純に魔術のみが使える訳ではない。

魔力が影響する部分の力を借りる事が可能となる。

『どつせ要らねー』

破壊神の力。

その一端だろうと、一つの世界に住まう存在からすれば、絶対者と成るに等しい。

真性の魔神の力の性質ならば、世界であろうと壊せるだろう。

「
」

眩暈めまいがした。

この世界から追い出されるとはいえ、いきなり絶対的な強者として君臨する事になった。

スラムの住人がアメリカ大統領になると変わらない。

『つても魔力だけだし、それを使えるかどうかまでは面倒見切れねえぞ。ニンゲンじゃあ、自分以外の魔力を扱うのは骨が折れんだろ』
「それならば問題はない。因子から知識が来ている。魔力の扱いは魂に叩き込まれた。何より魔神の因子がある。自分以外の魔力というのが当て嵌まらない可能性も考えられる」

無然と答える男に、魔神は言った。

『ほお？ 侵されてるみたいだな。もうあんまり時間ねえぞ？』

「分かっている。一つ聞くが、名前とは自分が、自分の名だと認識していればそれでいいのか？」

『ああ』

親は居ない。

しかし、自分を育ててくれた恩人に貰った名は捨てなければなら
ない。

この世界との繋がりには、神の勢力に狙われる可能性を生んでしま
う。

親から貰った名を棄てる傲慢なクソ餓鬼には、丁度いい。
俺が一番初めに呼ばれた悪態を拾おう。

「……メルド。ラクス・M・ファアの名において汝と契約する」

ルシファア。Lucifer はもともと、ラテン語で「光を帯
びたもの」(Lux 光 + -fer 帯びている、生ずる)を
意味する。

メルドとは、フランス語において、糞便を指し示す。
傲慢なクソで、十分だ。

『悪趣味だな、ラクス？ 契約は成った。我、魔神カムイの名
において汝に糧を授けよう』

瞬間。

黒い光が身体に収縮した。

……感じる。

己を満たす有り得ざる力。

何もかもを可能とする無限に等しき破壊の魔力。

「……カムイ。アンタが勝たないと俺もヤバイ。勝ってくれよ。ア
ンタが世界の敵でも。俺だけはアンタに命運を預けている」

『ハ。誰に言っただけやがる。正面からかち合っただ。なら破壊を司る
俺が負ける訳がねえ』

「ならば、どの世界で好きにしようか問題は無いな。楽しみに待っ
ていよう」

『おう、任せろ。行ってくるぜ』

世界が反転する。

黒い世界。黒い石。

全てが消えた。

残ったのは、己の宿る破壊の力。

見渡せば、自分が居るのは、

「……山頂、か」

戻って来たのならば、やる事をやらなくてはいけない。

残された時間はあと僅かしかない。

置いてあったリュックから携帯電話を取り出し、覚えている番号をプッシュ。

3コールの後、受話器が取られ、

『 緊急用とは穏やかではないな。何があった？』

「隊長。すみません」

隊長は何も言わずに聞いてくれた。

ここで成すべき仕事は終わったからかもしれないが、それでも聞いてくれた。

除隊も略式だが行ってくれた。

悔いはない。

これ以上、この世界に居ていい理由は残っていない。

世界の構造を知り、莫大な魔力を持つ自分ならば、世界を渡る事など造作も無い。

行く先がどういう場所なのかの特定こそ時間的な問題があり、不可能だが。

「仕方ないか」

魔力が虚空に魔方陣を描く。

半径5メートルほどの巨大な陣を用意。

続くようにラクスは詠唱する。

造作も無い行為だが、万全を期するに越したことはないからだ。

詠唱の文面は自身の設定に習う。定型など存在せず、方向性を決

定するのが言霊。

「開け、世界よ」

空間に開いた穴を潜り抜ければ、別世界。

「……まるで雪国だな」

などという意味のない事を呟き、周囲を見渡す。

確認できるのは、満点の星空と、

「ふむ」

森がある。

眼下に。

つまり自分が居るのは上空であり、絶賛落下中という事実。

高度は約30メートル。

人間に耐えられるような衝撃ではないだろう。

しかし、この身体は既にヒトの領域に無い。
そして、魔に属する術を持つ。

「浮遊」

激突する直前に空中浮遊の術式を起動すれば、最低空でホバリング状態。
着地した。

視界に映る森は、精霊に満ちていた。
感覚でも感じている。

「……で、ここはどこだ」

森といえば、聞こえはいい。

しかし、どこを見ても森しかないのであれば、厄介でしかない。
だから、という様にラクスは世界へと接続する。

方法は因子を利用し、世界に干渉するだけだ。

世界の情報を知るならば、世界に聞くのが一番早い。しかし、
……拒否された、だと……？ 世界の敵は伊達ではないな。

「……。早く敵を打倒して欲しいものだ。不便だぞこれは」

つまる所、カムイは世界の構造などは知っているが、中身に興味は無かったという事実。

よって情報は何一つとして無い。

いや、一つ言える事は、

「……新鮮な空気だなあ。イランとは雲泥の差だ」

気付けば周囲に居たはずの精霊も逃げ出していた。

自分の周りだけ、神秘が存在しない。
流石は世界の敵。

棒立ちのまま、どうしようか思案していると声を掛けられた。

「やあ、こんな時間に一人で森林浴かい？」

振り向き、声の持ち主を確認して、驚いた。

ポケットに手をつ込み、スーツに身を包むトレンディな30代。
眼鏡はチャームポイント。

……高畑・T・タカミチ？

ここは「魔法先生ネギま！」の題材になった世界だろうか。
甘い世界で楽しそうだ、というべきかどうか。

第一話：偶然とはかくも恐ろしい（後書き）

書いちゃった。疲れたけど。息抜きですが。

これも途中でやめる気はありません。更新不定期だと思えますけど。ネギま！の世界飛んだ訳ですが、他に行く世界どうしましょ。有名所がいいんですけど、まだ考えてなんですよー。

適当な事はしないでそれなりに考えて書くつもりです。

ライフストリーム F F 7より。

第二話：足場は必要だろう

高畑・T・タカミチ、か。

麻帆良学園において、学園長を除けば最高戦力である元・紅い翼。現在の状況を鑑みれば、こちらは不法侵入した危険人物だし、捕縛対象だろう。

だが、こちらも態々敵を増やす理由はないし、手を出されなければ出す必要は無い。

麻帆良は出来る事なら拠点にしたい場所でもある。

保護などの恩恵を得るならば、

……指示には基本的に逆らわない方がいいだろう。

麻帆良側が懸念するのは、俺が体制側に対して叛意を持っているか否かと、戦力を保有しているか否か。

大別すればこの二つ。

魔力が無限にも等しいが、意識しなければ顕在化する事はない。

だが、それではただ確保されるだけの一般人に過ぎない。

ある程度の戦力を示し、その上で麻帆良に叛意を持たず、しかし、確固たる立場を確保する。

これを現状での目標として設定。

「やあ、こんな時間に一人で森林浴かい？」

ゆつくりと振り返り、問いかけてくる高畑と相對する。

7メートルは距離があるが、口に啜えられたマールボロの匂いが漂ってくる。

随分と匂いが染み付いていそうだ。

「ふむ、それも楽しそうだが、今は違うな」
「……へえ？ 一体何をしていたのかな？」

答えた瞬間、高畑の眼に剣呑な色が覗いた。
警戒だ。

危険だと判断すれば、即座にポケットに納められた拳を抜くのだ
ろう。

「簡単に言えば、逃亡だ」

嘘は言っていない。

あの世界に戻れないのは事実であり、上位世界だ。干渉する術も
ない。

「……それは。ここに保護を求めて逃げ込んできた、という事かな
？」

「いや。別に目的地は無い。適当に跳んだ先がここだっただけだ」
「……なら、君にはこのこと敵対する意思はないと思っただけいね？
でも悪いけど拘束させて貰う。抵抗しなければ手荒な真似はしない
から大人しくしてくれ」

学園側としては当然の措置だろう。

危険人物である可能性を過分に持つ人間に対する行動だ。逆らえ
ば、それこそ不穏分子と化すだろう。

「ふむ、構わない。だが一応拘束の理由を聞かせてくれ」

「……さっきあった魔力反応と、君の『跳んだ』という発言を無関
係とは思えない。危険な反応だったのは確かなんだ、了承して欲し
い」

世界転移時における発生魔力は考慮に入れてなかった。
世界に属する存在にとって、無視出来る様な魔力ではないだろう。
間違いなく不穏な目的を持った侵入者扱いだ。それにしても破格
と割り切るしかないと判断する。

「仕様がないな、それは。時期が悪かったと諦めよう」

「……ああ、そうしてくれ」

高畑の作った間は、こちらがその反応の原因だと認めない発言の
真偽を推し量ったのだろう。

すぐに止めたのはそういった類の駆け引きが苦手だからか。
思考を続けながら、取りあえず無抵抗を示し、両手を上げる。

「……助かるよ」

そう言うと、高畑は携帯電話をスーツの内ポケットから取り出し、
どこかに連絡を取る。

恐らく学園長への報告。

だが、その間も視線をこちらから外すことはない。
ラクスにとって、睨まれる程度の事は日常茶飯事だ、別段気にす
る事でもない。しかし、

「……うざつたいな、殺してしまおうか……。む？ 殺す？ 私
がここまで短絡的かつ無謀で愚かにも？」

否。これは俺の思考ではない。

「……カムイ、か？」

魔神の因子を核にして俺という人格を再生したが、その強大さ故
か、まず肉体を浸食したのは間違いない。

そして、今。

精神にまで影響が出た。

肉体と精神の双方にまで影響が出てきたという事実は、

…… 肉体は完全に魔神の因子に侵されたか。

魔神は、全ての神々ですら殺しきれなかった存在。

その因子から再構成されたこの身体は、或いは塵一つからでも再生する可能性すら考えられる。

己の根幹たる部分は俺のままでも、付属する部品は全て劣化した魔神になってしまふのだろうか。

…… 不安だ。不可能が存在しないが故の精神は。

などと考えていけば、通話を終えた高畑が言った。

何故か更に警戒を強めた様に見える表情で、

「ついて来てくれ、学園長が会うそうだ」

「…… 助かるよ」

高畑は電話を取り出し、学園長へ報告をする。

その間の眼を離してはならない。擬態の可能性は捨て切れない。

「高畑です。侵入者を捕らえました。先ほどの現象に関与していないと“主張”していますが、真相は不明です。状況的には信じる理由がありません」

『うむ、ご苦労じゃったの、高畑先生。今そちらに神多羅木先生が向かっておる。合流してその侵入者とやらを連れてきてくれ』

本当に大丈夫なのだろうか。

『逃げてきた』という事は魔法世界の犯罪者か何かである可能性も捨てきれない。

…… 麻帆良学園に刺客をどこかの組織が送ってきた？ まさか明

日奈君を？ いや、それはない。完全に消息は絶っている。辿り付く術はない　ッ！

一瞬だったが、確実に感じたそれは殺気。刺すような、しかしどこか漠然とした殺気。しかし眼を逸らしたのは少年の方だった。

まるで自分で自分に驚いているかのようにも見える。

……何故？ 敵対しているならもっと巧くやりたいはずだ。態々電話を掛けてから殺すのは不自然だ。

『高畑先生？ どうしたかの？ 高畑先生？』

「あ……」

不自然な侵入者。

何が狙いなんだとしても、その狙いが何なのかが分からなくては対策も取れない。

だが、明確な敵対行動を取る意思すらないのではこちらから攻撃するわけにはいかない。

「すみません、警戒しておいてください。今から歩いて連れて行きます」

『む……。了解じゃ。気をつけての』
「はい」

通話を切り、警戒を解かずと言う。

「ついて来てくれ。学園長が会うそつだ」

……鬼が出るか、蛇が出るか。

高畑に連れられ、夜の森を歩いてるとサングラスとヒゲがやたらと似合うスーツの男が来た。

こちらの両手を拘束する手際の良さを見て、ヤクザかと思えば教師だと言う。

体捌きなどを見ても間違いなく戦闘系の身のこなし。些か信じがたい。

「なんだ？」

と、ヤクザ風教師は言った。

不躰な視線を向け続けたからだろう。

なんでもない、と無難に返し、男の使う魔法に注目した。

……風の精霊か。

両手と親指を固定して拘束する縄状の風だ。

この身体故に見えるのだらう風の精霊は、若干涙目になりながらこちらを覗んでいる。

所詮は世界の敵だ。嫌われるのも仕方ない事だが、加減をいうものを忘れたかの様に締め付けてくるのはいかなものか、とラクスは思う。

ラクスは思い出した様に顔を上げ、

「ああ、そうだ。そのヤクザ教師。悪いが煙草は消してくれ。ア
ンタもだ。俺はまだ23でな、最後の成長の可能性を信じているんだ」

そう言うと、神多羅木は苦笑して携帯灰皿に煙草を収納してくれた。高畑も硬い表情ながら、携帯灰皿に突っ込み、火を消した。

高畑は全く警戒を解かない。

随分な危険度評価を付けられたらしい。

だが、こちらとしても警戒を弛める事は出来ない。

麻帆良学園は、魔都。

このご時世に辻斬りを実行する無責任侍や跳弾を使いこなすゴルゴ13もどき、拳げ句の果てには中距離幕之内まで居る常時異常地帯なのだ。

どいつもこいつも危険だらけだ。自分の常識でしか物事を図ろうとしない。

関わった瞬間に荒事まで発展してしまう。魔力無しでは対抗出来まい。

……保険は掛けおくべきか。

体内に隠れる程度の魔方陣を構築。

術式は、攻撃察知型自動防御。発動する防護壁は世界隔絶型不可。詠唱必須かつ陣が大きすぎる。

あまり強力なものは不可能だ。

防護壁変更。攻性防壁。対象は身体に届く全干涉。

攻撃構成は、危険干涉の破壊。

……よし、完了。流石に破壊に関しては効率がいい。

術式を設定し、気付く。

まるで渋谷駅の様な外観の校舎が目の前にあった。

「……？」

「すぐそこだ」

こちらの雰囲気を感じたのか、神多羅木が答えた。
すぐそこ。

眼前に建立されている校舎。

これが目的地だと理解する。そして、校舎に大きく書かれた文字を、ラクスは読み上げた。

「……女子中等学校」

「まあ、なんだ。気にするな」

教師二人に連れられた男が一人、女子校に連行。

……もしも昼間なら大問題だな。

嫌な想像に辟易としながらも、先行する高畑の後をついていく。幾度か階段を登り、ようやく足が止まった。

高畑が扉をノックし、

「学園長、連れてきました」

「うむ、入りなさい」

中からの返答を受けて、開く。

高畑が入室し、続いて背の神多羅木に促されて歩を進めれば、一室というには広大な空間が広がっていた。

扉の対面は巨大なガラスが三枚並び、壁の8割を構成している。その前に質素なデスクがあり、そこに座る妖怪の如き老人が居た。

そして、部屋の左右に整列する人間が居た。

……なるほど。

向かって右側。本棚の隣から階段の前に並ぶのは明石教授、ガンドルフィーニ、瀬流彦の三名。反対の左側に葛葉刀子、式集院光。

主立った魔法先生が集められていた。

学園側の警戒の高さを示す光景だろう。

「そこに掛けなさい。」

「失礼する」

促されるままにソファに腰を下ろす。

座れば、窓際の学園長と真つ正面から向き合っ形だ。

物理、魔法に関わらず、あらゆる干渉はこちらに届く前に迎撃される。

とはいえ、両腕は拘束されたまま。

警戒を怠るべきではない。

……無用の警戒心を植え付ける愚は避けたいが……。
ある程度の力を見せなければ立場を得ることは出来ない状況にある事を念頭に置き、ラクスは言った。

「それで、何故俺はここに呼ばれたので？」

高畑は学園長の傍に控え、神多羅木は刀子の隣に位置を変えた。

高畑は万一の護衛、神多羅木は遊撃か。

「聞きたい事があつてのう」

「……聞きたい事」

「うむ。君はこの麻帆良学園に何用かね？」

ラクスは近衛近右衛門の周りを浮遊する精霊を見た。

長い時間を掛けて研鑽を積んだのだろう。

普段から使役されているはずの精霊に不満の色はない。

しかし、この俺に向かって干渉するという行為には恐怖を覚えな
いはずがない。

魔力を完全に隠蔽しているならまだしも、今は防護術式を展開し
ている。

人間は無理でも、世界を構成する要素である精霊は感じとれてし
まう。

絶対的な『破壊』の存在を。

故に、近右衛門は感じる事になるだろう。普段のように魔法が発
動しないと。

「別に何も無いが」

「何も？ ここに用があつたのではないという事かね？」

近右衛門の表情に特筆すべき変化はない。
流石に交渉事の場合が違うという事か。
ラクスは高畑の顎で示し、

「その男にも言った通りだ」

「高畑先生じゃ。出来るなら始めから説明しては貰えんかの？」

質問と同時。

近右衛門の周囲の精霊が動いた。

こちらへと飛んできたのだ。

人型のない、下級精霊のみだが、確かな精度でラクスへと向かっていった。

俺に向かわせるといふ難事を見事に成し遂げた大魔法使いに畏敬の念を覚えつつ、ラクスは感じた。

攻性防壁が発動したのを。

次の瞬間、近右衛門の使役した精霊は『破壊』の魔力に干渉され、
跡形も無く消滅した。

その事実が分からない近右衛門ではない。あるいは魔法が消滅したとしか感じていない可能性もあるが、その表情は欠片として動いていない。

……やはり狸だな、俺程度とは役者が違う。

気付いているのが当事者のみ。

公的な見解として用いるには弱い。呆けられるだけだろう。

「……俺の名は、ラクス。ラクス・M・ファーだ。好きに呼ぶといい。侵入に関してだが、ただの事故、偶然だ」

名前か、あるいは事故という言葉に何人かが反応するが、それ以上の応答はない。

近右衛門は魔法先生を無視して、

「わしは近衛近右衛門じゃ。この麻帆良学園の学園長、そして関東魔法協会の会長をしておる。この者たちはこの学園で魔法先生をしておる方々じゃな」

ラクスは会釈も、挨拶もしない。

今後どうなるかは、不明であり、話し合っているのは今だからだ。近右衛門もそこ事を気にしない。

「して、事故とはどういう事かの？」

「ふむ、それは」

「おいじじい！ あの魔力はなんだ！？」

ラクスが口を開いた時、荒々しく扉を開けて入ってきたのは二人の女性。

一人は、身長140センチ程度の小柄な幼女で、ダーディブロンドの美しく膝まである長い髪を乱しながら扉を開いている。

もう一人は耳が機械であり、薄い緑色の長いストレートヘアが印象に残る女性。

エヴァンジェリンとその従者、絡繰茶々丸だ。

「今、それを聞こうとしていた所じゃ。ほれ、そのラクス君がその現場におつての」

近右衛門の言葉を聞き、エヴァンジェリンは茶々丸を連れて、ソファに座るラクスの前に回り込む。彼女はラクスを一瞥しただけで、

「……こいつが？ 何も感じんぞ。こんな一般　！？」

何かを感じたのか、言葉を切つて鋭くラクスを睨み付けた。
ラクスは何も言わない。

しかし、内心では確かに驚いている。
確かに魔力は隠蔽している。初見で見破られる事はないの
だ。

……こいつ、何に気づいた？

吸血鬼という存在は、何を見たのか。

「……………貴様、何者だ」

「質問の意図が分からん。分かるように言え」

「……………茶々丸、お前は何か分かるか？」

「。いいえ、サーチの結果、ただの人間かと。ただし、筋肉の
発達具合から何らかの武術、あるいは戦闘行為の生業にしている可
能性が高いです」

それを聞いたエヴァンジェリンは黙り込む。

ただこちらを睨みつけるだけ。まるで憎い相手でも見つけたかの
様に猛烈な眼光だ。

しかし、それだけは話が進まない。

「何がどうしたのか。分かる様にするか、しないならば出て行け。
話の邪魔だ」

「……………精霊だ。精霊が貴様を嫌っている。人間であろうと、吸
血鬼であろうと我関せずの精霊が、だ」

一息。

「タカミチの様に精霊が無視しているのではない。“嫌っている”
のだ。異常としか思えん。　　言え、貴様は一体なんだ？」

精霊が俺を嫌っている。

……吸血鬼は、人間よりも深い世界を見ていたか。
ラクス・M・ファーという人物に宿る力ではなく、それを恐れる精霊という異常。

そこに気が付いただけか。しかし、隠蔽という観点では失敗か。
精霊から隠し切るには、術式を使う必要があると、覚えておこう。
理想的な展開とはかけ離れているが、仕様がな。

「なるほど、なるほどな。……『失せる』」
「！」

その一言で、ラクスの両腕を拘束していた風の魔法が霧散した。
全ての魔法先生が警戒態勢を取る中、近右衛門だけは涼しげな顔で口を開いた。

「何の、つもりかね？」

「ちよつとした証明だ。俺が意識すれば、周囲での精霊干渉は一切出来なくなる、つまり魔法は使えんという事だ」

「
」
「さて、数の不利がほぼ消えた所で気軽に交渉に行こう」

「ふむ、すまんのお。威圧するつもりはなかったんじゃが、皆集まってきたら」

魔法的な分野への関与を知られるのは、問題ない。
近右衛門の精霊を撃退した時点で気付かれています。

「そうか。まあいい。ならば、まずはお互いの要求の確認といこう」
「そうじゃな。しかし、こちらにはお主に要求する以前に、何が出るのかもはっきりせん。それでは要求など出せんのか？」

「馬鹿を言つな。貴様ら学園の体制側の要求など決まっているだろう？ 『規律を乱すな』だ」

「ふおおおお！ なるほどのう、確かに間違つてはおらん。それが教師の仕事じゃ」

「おい、小僧」

と、化かしあい割り込む声がした。

エヴァンジェリンだ。

「なんだ、小娘」

「抜かせ。……貴様、精霊の干渉を無効化したな？ 私の呪いはどうにか出来るか？」

問いに、ラクスはエヴァンジェリンを見て、

「見せてみる、少し動くな。……ふ、む。問題はないはずだな」

「……ほ、本当か！」

余り期待していなかったのだろう。

エヴァンジェリンは驚愕と歓喜に身を震わせた。

確認の言葉にラクスは一度頷き、

「交渉で言う嘘に持ち合わせはないな」

「よし、ならば今すぐやってくれ！ ああ、報酬は心配するな。対価として好きなだけくれてやる」

「ま、待つんじゃ！ 勝手にその様な事をされてはかなわん！」

やはり、行為の前に近右衛門は割り込んだ。

エヴァンジェリンという世紀の大魔法使いを今失えば、ネギという時代の英雄を育てる最高の教師を失うに等しい。

英雄を信望する者達にとって許容できる事ではないのだ。

「近衛近右衛門。俺は傭兵として生きてきた。はした金で命を懸ける物好きだぞ？ より大きな利こそが俺を動かす。好きなだけ対価を差し出す者と、何も出さぬ者。どちらにつくかなど、誰でも分かるだろう」

「……じゃが、エヴァンジェリンはナギから、大戦の英雄から預かっておる。勝手をする訳にはいかんのじゃ」

「知らんよ。傭兵は出すものさえ出さなら基本的に雇用主は選ばない。そして雇用主同士の争いは関係ない。止めたければ、止めるに足る利を出せ」

エヴァンジェリンは、呪いを消せるならばあらゆる財を持ち出すだろう。

それこそ魔法界から失われたはずのグリモアだろうと。いかに麻帆良学園といえども、それだけのものに匹敵する価値は少なく、好きに使っていいはずがない。

苦悩する近右衛門を、エヴァンジェリンは笑った。

「そついう事だじじい。私は私でやる事がある。好きにさせてもらうぞ」

「……エヴァ。ネギ君との約束はどうするつもりじゃ？ まさか反故にする訳じゃなからう」

「貴様……」

この言葉はネギとの茶番を覗き見していたという宣言と同義。

エヴァンジェリンとしても、予測していなかった訳ではない。

しかし、それと感情とは話が別だ。理解は出来ても納得はしない。そんなエヴァンジェリンの感情を察してかどうかは分からないが、

近右衛門は頭を下げてこう言った。

「頼む。後1年だけでいいんじゃない。麻帆良に留まっとくれ」

エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェルは、誇り高き悪の魔法使い。

決して約定を違えぬ。

それは、契約を結んだのならば、決して反故にしてはならないという己に課した「誇り高き悪」である為の制約。

「……………チツ。おい小僧。名はなんという。」

渋々ながらの了承が出た。

口に出さないのは、プライドからだろうか。

両側の魔法先生の幾人から、無言の抗議が近右衛門に飛んでいるが、二人は気にしない。

「俺はラクス・M・ファー。好きに呼んでくれ」

「ラクス・M・ファー？ ……悪趣味な名だな。偽名か」

ラクスのあからさまな名前に、エヴァンジェリンは顔をしかめて呟いた。

だが、

「本名だ。今はな」

あっさりと、ルシファーの名が本名であると言いつつ。

間違はなく何か事情があるのだと、察したエヴァンジェリンは、それ以上の詮索を止めた。

誰しも聞かれたくない事情の一つや二つ持っている、知っているからだ。

「……そうか。帰るぞ、茶々丸。ラクス、お前も来い。」

「了解だ。だが」

「待ってくれ。まだ聞きたい事がある」

ラクスが出て行こうとするエヴァンジェリンに言葉を向けた時、それを止める声があった。

「詳しく君の事を話してくれないか。例えば、何故あの時僕に殺気を飛ばしたりしたのか、なんてのはどうだい？」

高畑だ。

既に完全な戦闘態勢を取っている。

高畑の言葉で他の魔法先生にも再び緊張が走った。

「……………」

ラクスは煩わしそうに高畑を見て、上げかけた腰をソファーに戻した。

と同時。

エヴァはもう一つのソファーに我が物顔で座った。

その際に茶々丸に紅茶の用意を命じるのは流石だが、こちらの問題に関わる気が無いという意志表示でもある。

つまり、こちらの事情に関与する事もないという事だ。

ラクスは雇い主の方針を理解し、口を開く。

「すまないが、心当たりがない。いつの話だ？」

聞いた高畑は表情を動かさず、しかし闘志を漲らせ、

「……僕が学園長に連絡していた時だ」

「ああ、あの時か」

ラクスは思う。

まずい、と。

事実としては魔神の因子に侵された為だが、言える内容ではない。むしろ隠しておきたい事柄の一つだ。

故に思考する。

そして思い出す。己の発言を。

この麻帆良に侵入した理由は「逃亡」だという事を。

「一瞬だが、アンタが俺の追っ手である可能性を危惧した。すぐにあり得ないと否定したがね」

一応の筋は通せる内容だ。

穴はあるが、その思考に至るはずがないとは言えない。

「君は一体」

「待ちなさい。高畑先生」

高畑の言葉を学園長が切った。

突然の割り込みに高畑は疑問に眉を寄せて、

「学園長？」

高畑の声には応えず、ただラクスの眼を見て言った。

「状況が状況じゃ。見えざる手を恐れるのも無理はなかつ」

「……ああ。全くだ」

声の調子とは違い、一切の遊びの無い近右衛門の表情を見た。ラクスは一拍遅れて理解する。

これは、先ほどの精霊に向けた行為に対する代償だと。

この追求をさせぬ代わりに水に流せ、と言っているのだ。

……仕方がない。

と、ラクスはため息を一つ。

「まあ、そういう事だ。すまなかった」

「……そう、か」

ラクスは素直に謝罪する。

そして、謝罪を受けた高畑も、一言もらすだけで下がった。学園長に言われたのなら仕方ない、という所だろう。

……今後も警戒は必要か。

高畑の危険度をそう評価し、ラクスは近右衛門に眼を向け、

「さて。周りの話は終わったな。改めて話し合おう」

「うむ。ではわしから言おうかの」

「構わない」

「単刀直入に訪ねるが、お主不法入国しとるじゃろ？」

いきなり法を犯している事を指摘され、

「そうなるな」

しかしラクスは平然と頷いた。

まるでその程度は大した問題ではないと言うように。

「……ふむ。そうなるのお？　こちらとしても国家権力に報告せねばならんのだが？」

「問題ない。「地下」に潜れば戸籍程度買えるだろうよ。大体それを言うならアンタ方「魔法使い」という戦力を保有した存在を国内に置いておく事の方が問題だろう?」

「ふおふおふお。それこそ問題あるまい。不可能を可能とするのが魔法じゃ。隠し通すという無理ものお?」

お互い、軽い手札では意味が無かった。

互いで互いの面倒を増やすだけならば無意味どころか邪魔でしかない。

続いて言葉を放つたのは近右衛門だ。

「お主はこの麻帆良と敵対するかね?」

「雇用主がそれを命じてなおかつ。危険度に見合う報酬があれば。」

学園側は、ただここの住もつとしているだけの市民に矛を向けるのか?」

「そんな事はせん。市民を治めるのは行政の仕事じゃ。関与する事は無かるう。じゃがお主は裏の住人で、我らはそれを治める義務がある。暴走などされてはそれこそ危険じゃし、先ほどのアレなども」

世界転移時に漏れ出た魔力。

それはこの世界の住人にとって無視できるレベルではなかったという事。

失敗を悔いる感情を、表情に出さぬようにラクスは努めて無表情をする。

「アレ、とやらが何を示すかは定かではないが、俺の戦闘方法などを明かせ、という事なら不可能だ。それは俺の寿命を縮めてしまう。」

第一に

ラクスは静かに部屋の両側に並び立つ魔法使いを一瞥して、

「未熟者に暴走の心配をされる謂われは無い」

「……！」

その一言で周囲の空気が無言で激化した。

このまま戦闘が始ってしまうのではないか、というような雰囲気の中、ラクスは苦笑する。

「いや、すまない。口が過ぎたな。だが、理解してもらおう。そちらが俺を信用していない様に、俺もそちらを信用していないだけだ。実力云々は流してくれ」

激化した空気はしぼんでいき、僅かに残った猜疑心を吹き飛ばす大きな笑い声が響いた。

近右衛門だ。

「ふおおおおおおお！ 若人は元気が良いのう。じゃがの、先生方もまだまだ血気盛んじゃ、斯様に言われるだけでは収まりがつかん。どうじゃ、あくまで手合わせじゃが、一戦してもらえぬか？」

ラクスは思う。

老獺だ、と。

暴走云々は間違いなくブラフだが、こちらが戦力を明かしたくないのは事実。

しかし、暴走しないという証明をしなければ拠点を一つ失ってしまふ。安易に手に入れられる住居は貴重だし、資材の調達がこれほど簡単な土地を捨てるのは惜しい。

だが、いつまでも雇用主の世話になっただけでは、いずれ立場が逆

転してしまつ。

反対に証明をするという事とは手札を晒すこと。

二律背反だ。

暴言で誤魔化そうとしても簡単に食いつかれる。

そして果ては断れば、「収まりのつかない」魔法使いに蹴撃され、受ければ堂々と戦力をいくらか分析される。

完全に敗北した訳ではないが、手詰まりだ。

……やはり交渉ことは向かな。

「一戦だけだ。日時は任せるが、今日はもう遅い。エヴァンジェリンの世話になるので連絡はそちらに」

「了承じゃ。恐らく明日の夜になるじやろ」

「……了解した。地獄に落ちろ、近右衛門」

「ふおふおふお」

大きいため息を一回。

エヴァンジェリンは含みのある笑みを見せながらソファから立ち上がる。

追従して、即座に茶々丸は後ろに控え、一礼。

「ほら、とつとと立て。帰るぞ、ククク」

「……ああ」

近右衛門の掌の上で踊らされ、不機嫌を隠そうともしないラクスは先行して出ていったエヴァンジェリンの後を追った。

ラクスと闇の福音が去った学園長室。

両側に立っていた魔法先生のほとんどは学園長に詰め寄っていた。

「学園長！ 決して口を挟まないという約束でしたから何も言いませんでしたが！ どーいう事ですかあああ！！」
「ガンドルフィーニ先生、そう怒鳴らんどくれ。老い先短い身には堪えるのう」

まともに応えぬ近右衛門の首に、刀子が太刀を添えて、

「 斬りますよ？」

「みんな怖いのう。じじい虐めて楽しいかつ！！」

あまりにも收拾のつかない状況に、高畑が代表して言った。

「で、学園長。実際どういとお考えなんです？」

「ううむ。考え、というよりは次善策じゃな。彼は麻帆良学園に敵対する行動をとったらんのは事実じゃ」

そして、

「敵対行動を取らん者を無理に拘束する事は出来ん。じゃが、その力は無視出来ん。じゃから戦力評価出来るようにしたんじゃ。大事ある前に情報があれば違うからの」

「……なるほど。それなら、僕が出ます」

当然の立候補に、周囲は賛同する。

しかし近右衛門は頷かなかった。

「ダメじゃ、高畑君」

「！？」

「わしはの、彼に魔法を向けたんじゃ」

「な
」

その場に居る全員は驚愕する。
なぜならば、誰一人として魔法行使に気付けなかったからだ。

「結果は、どうなったんです？」

ガンドルフィーニが聞いた。
だが近右衛門は頭を横に振り、

「魔法は消滅させられてしもうた。何をされたのかも分からん。この情報は規制する。無闇に公言してはならん」
「……！」

今度こそ、全員が絶句した。
自分たちは魔法行使に関わる攻防に気付くことすら出来なかったのだ。

だが、高畑の驚愕は意味が違う。
魔法の消去、消滅。

……まさか、王家の！？
学園長がそれに思い至らないはずがない。
確認の意味を兼ねて視線を向ければ、学園長は頭を振って、

「魔法での敵対は、精霊への命令から見ても無謀じゃ」
「なら、尚更僕が出るべきです！」

万一でも彼が王家の存在ならば、その魔力は特質な物。
災厄とまで言われたあの方で知っている。
自分ならば、確かめる事も出来るはずだ。

「かもしれん。じゃが、カンカホウは繊細な技。万一でも干渉された場合、高畑先生が危険じゃ」

「
」
明確な否定。

理由は問題ではない。

確かなのは、学園長が高畑に任せる気がないという事実。と、言葉を失った高畑の横に一人の女性が立った。刀子だ。

「私の出番、という訳ですね？」

「うむ。神鳴流は気のスペシャリストじゃからの。刀子先生、お願いするぞい」

「はい。神鳴流に斬れぬモノなどありません」

近右衛門は思う。

麻帆良学園に勤務する魔法先生は優秀である。

しかし、実力面での充実とは裏腹に精神面では脆い。

無論、そうではない者もいるが、多数ではない。

魔法が通じないという事実は遅かれ早かれ明るみに出るだろう。

「頼もしいのう」

その時点で、最強の魔法使いと恐れられる近右衛門が無力化されたと等しい。

その上更に、大戦の英雄「赤い翼」の一員である高畑・T・タカミチまでも破れてしまった場合。

彼に対抗する術が無いと多くの者が思ってしまう。

事実がどうであれ、最大戦力、最高戦力が通用しないと思われる事は致命。

土気の面でこれほど危険な敗北は無い。

……ままならぬ。

その上、高畑には彼が王家に連なる可能性がある、などと思っ
ている節がある。

だが、それは無い、と近右衛門は確信する。

アスナ姫のマジック・キャンセルは彼女に接触した時点での消去
だが、彼のそれは違う。

明らかに彼から離れた地点で消去された。

その手際から能力として、魔力の消滅をコントロールしている事
がわかる。

王家の力であるなら、力場が発生させているはず。

そして、特異極まる力場を自分が関知出来ないとは思えない。

と、そこでガンドルフィーニが口を開いた。

「そちらは刀子先生にお任せします。 問題はっ！ ネギ君に関
与する可能性がある事です！！」

「うむ、そうじゃの。しかし、学園都市が怪しいという理由で拒否
する訳にもいかんしのう」

エヴァンジェリン邸に居座るといふなら、必然的に2・Aの生徒
と関わる可能性が出てくる。

エヴァンジェリンとの交友が生まれている時点でそれは明白だ。

だが、ラクスとネギの邂逅は避けるべきなのだろうか。

ラクスは自分のスタンスを押しつけない。

あくまで自然体で、自分という個を持っているだけだ。

或いはネギに対する刺激になる可能性も捨てきれない。

「何にせよ、今のままでは何も出来まい。しばらくは様子見じゃな。
監視は付ける。立候補者のローテーションで構わん」

「……了解しました」

理解は出来るが納得したくない、といった表情でガンドルフイー
ニは同意。

その他の魔法先生も了承した。
もう朝が近い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6383i/>

多重世界を渡り歩く

2011年9月11日13時21分発行